

日本書道史

第5講 「三跡と『和様』」

住川 英明 (岐阜女子大学)

第5講 「三跡と『和様』」

【学習到達目標】

- 三跡それぞれの代表的な書作品を挙げて、各人の書の特徴について、具体的に説明することができる。
 - 平安時代中期の「和様」の書の成立とその特徴について、概括的に説明することができる。
-

第5講 「三跡と『和様』」

1. 国風文化の盛行と三跡の登場

- 10世紀には、仮名文字や和歌などのいわゆる「国風文化」が盛んになり、文芸や美術などの多方面で「和様化」が見られるようになった。
- 小野道風・藤原佐理・藤原行成という3人の能書は、後に「三跡」と称えられ、それぞれの筆跡は、野跡・佐跡・権跡と呼ばれ、尊重された。

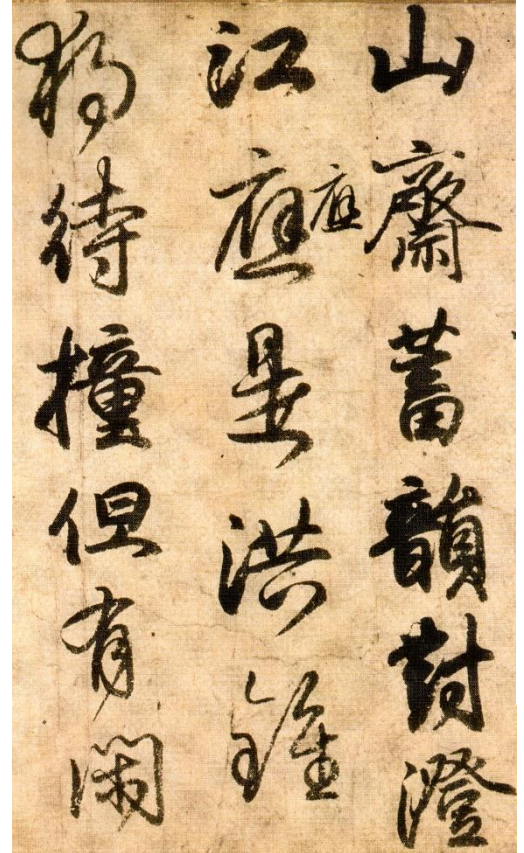
第5講 「三跡と『和様』」

2. 小野道風と「和様」の誕生

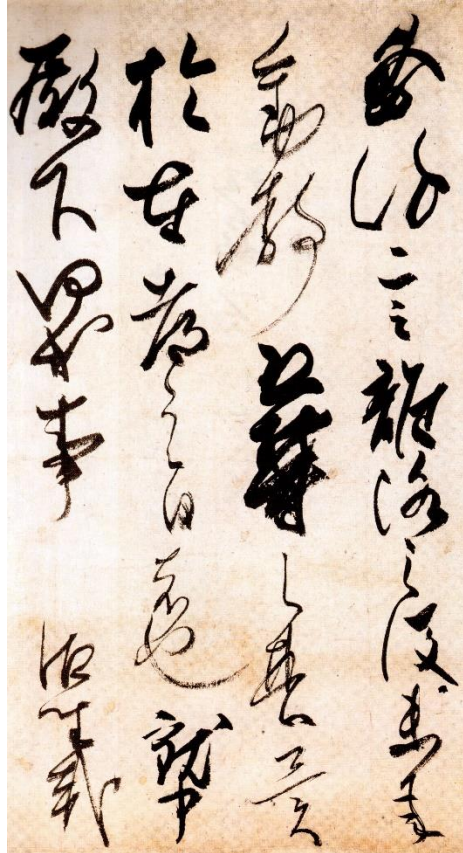
- 小野道風は、王羲之の書をよく学び、しかも十分に自分のものとして破綻がなく、格調が高い。
- 藤原佐理は、道風之行書体の書きぶりを踏まえて、主に草書体に持ち味を発揮した。
- 藤原行成は、道風の書の穏やかさに繊細さと明瞭さ、洗練された味わいを加え、道風の切り拓いた書境を展開した。

第5講 「三跡と『和様』」

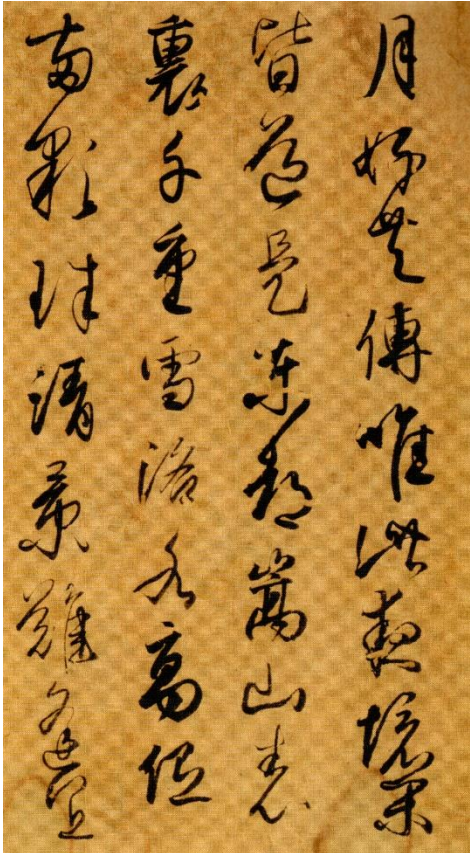
小野道風《屏風土代》（部分）



藤原佐理《離洛帖》（部分）



藤原行成《白氏詩卷》（部分）

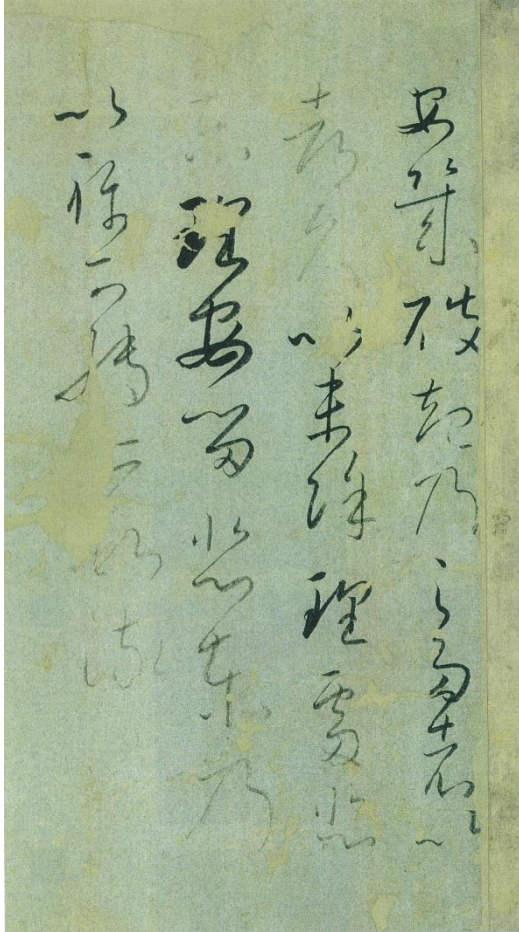


第5講 「三跡と『和様』」

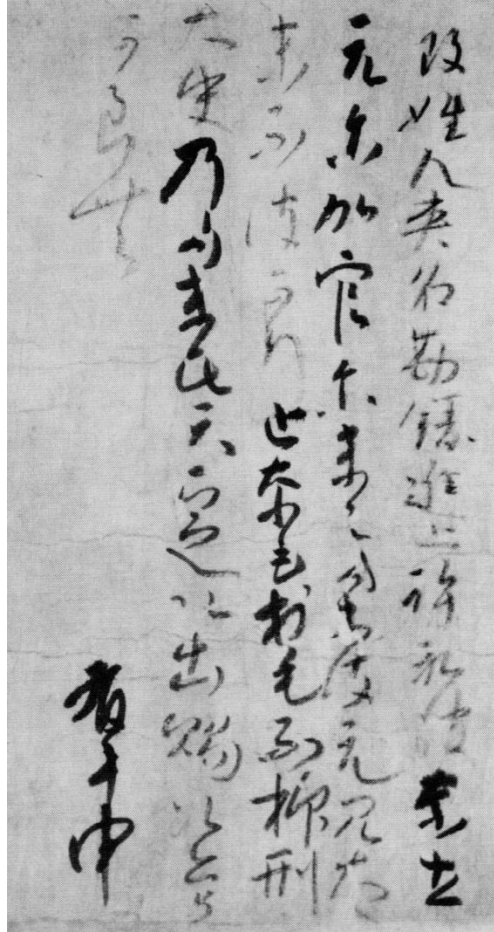
3. 仮名文における草仮名の使用

- 万葉仮名が、漢字の楷書体あるいは行書体によって表記されているものを「男手」「真仮名」と呼び、草書体によって表記されているものを「草」「草仮名」と呼んでいる。
- 9世紀半ばから10世紀半ば頃までは、草仮名が実用的に用いられ、10世紀後半には、古様を示す一書体として一定の役割を担っていた（古谷稔）とされている。

第5講 「三跡と『和様』」



《秋萩帖》 (部分)



《有年申文》 (部分)

昔の名称		今の名称	変体仮名	平仮名
男 手・真仮名	おのこで まがな	草仮名		

奈	な
奈	
乃	な
乃	な

〔仮名の種類〕

課題

1. 小野道風の行書作品と藤原行成の行書作品とを比較しながら、和様の成立とその特徴について、考察しなさい。

第5講 「三跡と『和様』」

【学習到達目標】

- 三跡それぞれの代表的な書作品を挙げて、各人の書の特徴について、具体的に説明することができる。
- 平安時代中期の「和様」の書の成立とその特徴について、概括的に説明することができる。

日本書道史

第5講 「三跡と『和様』」

住川 英明 (岐阜女子大学)